

土佐のわらべ

第366号 《第388回（2011. 11. 10）子どもの本の読書会記録》参加者7名・文書参加2名

『見えない雲』 ゲートル・パヴェヴァング／著 高田ゆみ子／訳 小学館

『風が吹くとき』 レイモンド・ブリッグズ／作 小林忠夫／訳 篠崎書林

今年3月11日、東日本大震災に伴い福島第一原発事故が発生。あの日から8カ月が過ぎ、TVや新聞による報道は随分少なくなってきましたが、原発事故は収束してはいません。こんな時だからこそもう一度振り返ってみようと1987年、88年に読書会で採りあげられた2冊を再読しました。

チェルノブイリ前に書かれた『風が吹くとき』と後に書かれた『見えない雲』。

『風が吹くとき』は、政府を疑わず楽観的な初老の夫婦が核戦争の恐怖に直面する物語です。「被爆後も普通の生活をしながら日常会話を交わしながらも、だんだん体が弱っていき死に至る様子は、あまりにも悲しい」「この本が描かれたチェルノブイリ前の欧米では十分衝撃的だったかもしれないが、原爆の被災国である日本では知識量も多い。フクシマ後の今、イチオシの本とは言えない」という声がある。

『見えない雲』が書かれた背景には、1986年のチェルノブイリ原発での大規模な放射能漏れ事故があります。物語はチェルノブイリから数年後のドイツで原発事故が起き、人々の生活が壊されていく様子と事故後の社会の変化を、14歳の少女の目で淡々と描いています。原発は原爆と違って、放射能が漏れ出ても閃光も爆風も見えません。色にもおいもないのですから、まさに『見えない雲』なのです。原発事故の後、外国にいた祖父母以外の家族を全て亡くし、被曝者となってしまった主人公のヤンナーベルタ。事故から目をそらし忘れようとする伯母との生活はつらい。髪は抜け落ち、体や生活の不安を抱えて生きていくしかない。大切な友人も将来に絶望し自殺してしまう。事故後初めて帰宅した家には、外国にいて何も知らない祖父母が。やりきれなくつらいラストです。「心ない人がいるなかで、迷い苦しむ主人公を勇気づけよ

うとする大人もいたことが救いです」という声のように、被害を受ける子どもたちのそばにいる大人の考えや行動が問われます。

「地表の土を削り取らなければ安全はない。食品は値上がり、農家は破産。被曝者への差別。汚染度が高くても出る外出許可。24年も前に書かれた内容が今のフクシマにそのまま重なる。私たちは今まで何をしていたんだろうか・・・」

「放射能で人生を壊されていく現実の厳しさに愕然とした」と、フクシマと重ねた感想が多く見られました。りんごの花が咲き、菜の花が咲き、野菊も風に揺れる・・・季節の移ろいと共に花も咲くのに、そこに人はいないのです。「四季を持つ美しい日本が大好きです。この美しい国を守っていけるよう私自身ができることを考え行動していこうと思う」という声のように、訳者はあとがきに「感じる事、知ること、そして考えること」の大切さを書かれています。

原爆には核兵器反対！と叫べるけれど、原発に関しては暮らしに身近で、非常に大きなテーマです。「今こそ自然エネルギーへの転換の時ではないのか」と将来のエネルギーについても話題となりました。エネルギーの選択だけではなく生き方の選択もしなくてはいけない局面にいる私たち。大地に海に降り注いだ放射能との戦いはこれからです。フクシマの事故後で参加者の皆さんがどういう思いを述べられるのか不安もありましたが、「いい本に出会えて良かった」「たくさん子どもたちに読んでほしい」という感想を嬉しく思いました。

- * 被爆—爆撃を受けること
- * 被曝—放射線にさらされること

(C. O)